「18」

米倉朋佳　（40 代）

困ったことになった。こんなはずではなかった。

朝 7 時に出発し、新天地へ向かう車の中から見えた渡り鳥の群れに、涙が止まらなくなってしまったのだ。

到着まで 2 時間あるというのに、ハラハラと涙があふれてどうにもならない。

隣で鼻歌を歌う夫にバレれば、鬼の首を取ったかのようにひやかされるのが目に見えているので、うかつに頬を触ることもできない。なんとかこの事態をどうにかしなければ。

2 時間後に到着するのは私達の新天地ではない。18 歳になった長男の新天地だ。

田舎の性質上、家から出ないことには進学はほぼ不可能。私自身もそうやって 18 で家を出て進学。しかし外の世界は私を大きく成長させてくれた。

大事に大事に育てられすぎて世の中を何一つ知らなかった私が、親の望むまま地元で就職をしていたら、私はどんな世間知らずになっていただろう。

だからこそ。だからこそ、だ。

18 年前深夜の陣痛を乗り越えて朝方ようやく生まれた小さな小さな長男を抱きながら、この子がどうか元気に育ってくれますように、と願った。

いつか立派に外の世界に踏み出すことができますように、と。

あれからあと 18 年、とカウントダウンしていた日々は、あっという間にあと 12 年になり、あと 6 年になり、あと 3 年になり、あと 3 カ月、あと 1 カ月、あと 1 週間、あと 1 日。

夜ご飯の後、荷物は全て車に積み終わった。

別に会うのが最後になるわけじゃない。今はスマホがあるし、たかだか 2 時間の距離だ。会おうと思えばいつでも会える。

だいたい私が親元を離れた時、ホームシックにかかる暇もないほど楽しい日々だった。

彼の世界も毎日キラキラしていてくれたら。

それでいい、それがいい。

到着してせっせと荷物を運び、荷解きをするあなたが、

新しい生活に期待を膨らませるあなたが、

家事の説明をめんどくさそうに聞くあなたが、

今楽しそうにしていてくれてよかった。

今うれしそうにしていてくれてよかった。

ただ寂しいだけではない。安心して、誇らしくて、嬉しくて。

18 年後にあくとわかっていた心の穴は、そういうもので埋めればいいと思っていたけど、心の穴がそういうものでいっぱいになってぐちゃぐちゃになって溢れてしまったようだった。

長男にはバレずに済んだ表面張力も、案の定帰りの車の中では見事に決壊し、夫に大いにひやかされながら帰った。

生活の中でいちいち気付く長男の存在に、大きく心を揺さぶられる日々は少しの間続いたが、それでも毎日は続く。

続く毎日の中で、心の穴に溢れていたものも、少しずつ整理されていく。

時折送られてくる自分で作った弁当の写真に、私の知らない新しい長男の姿を見つけながら、まだ後に控える長女、次男のカウントダウンをする。

何年後か、この子達もまた新しい世界に送り出せますように。

その時は渡り鳥に我が子の姿を重ねても、「頑張って、行ってらっしゃい」と思えるようになっていたい。